

三水会会報

北里大学海洋生命科学部
同窓会会報 第 85 号

令和5年3月発行
(2023年)

編集者 内藤 文隆

発行 三水会(北里大学
海洋生命科学部同窓会)

事務局 〒246-0031 神奈川県
横浜市瀬谷区瀬谷5-22-1

TEL フリーダイヤル
0120-873-135

目次	P.1	九州沖縄地区親睦会	P.5
学部創立50周年記念式典／会員近況	P.2	研究室近況	P.6
〃	P.3	就職ガイダンス	P.7
卒後30年の集い／九州沖縄地区親睦会	P.4	お知らせ	P.8



小林理事長ご挨拶



島袋学長ご挨拶



記念特別講演の内藤洋氏



三水会より寄贈の壁掛け時計

学部創立50周年

記念式典に参加して

29 F M 阿見彌 典子

2022年10月9日に創立50周年記念式典・記念特別講演会が相模原キャンパスにて開催されました。コロナの状況によりオンライン開催になることが心配でしたが、無事に対面にて開催されました。まずは菅野学部長からの開催の挨拶にて始まり、ご来賓の学校法人北里研究所理事長 小林弘祐先生、北里大学学長の島袋香子先生、岩手県大船渡戸田公明市長からのご挨拶が続きました。その後、朝日田先生作成のスライドにより、海洋生命科学部の沿革が紹介されました。私が知らない頃の水産学部から、お世話になった三陸の海に囲まれた懐かしい校舎、先生たちの若かりし頃のお写真などに続き、東日本大震災時の様子、寂しくはありますが生まれ変わった三陸臨海教育研究センター、そして相模原キャンパス。2000年から本学部にお世話になっている私は、学部とともに過ごした時間は短いです。本当にさまざまなことがあったなあと不思議な感覚に囚われました。そして今、相模原にいたことがなんだかとても不思議な気持ちになりました。そして時間が経つこと、早さが少し怖くもなりました。私が学生時代にお世話になった先生方の多くが退職され、その度に時間の流れを感じます。と同時に、このよ

うにして少しずつ新しい海洋生命科学学部になっていくのだろうということに強く感じています。私は、有難いことに周囲の方々や学生にも恵まれて、毎日とっても楽しく充実した日々を過ごさせていただいています。これから先、100周年は厳しいと思いますが、90周年は一緒にお祝いできるかな？などと学部と私の未来について考える時間となりました。次は特に楽しみにしていた、自然・動物写真家である内藤 洋氏による講演「豊饒のカナダ西海岸・ベニザケの旅」です。講演を聴いた後に思ったことは、学生に聴かせたかった！！ということでした。YouTubeでも視聴はできますが、内藤氏の熱いお話は対面の方が確実に伝わったはず。サケや冒険のお話ももちろん面白かったですし、とても綺麗で迫力のあるお写真がやはり頭に残りました。ただそれに加えて



高橋三水会会長より菅野学部長に記念品目録贈呈

「北里大学水産学部・海洋生命科学部」で最高！」「好きなことに挑戦してみることが面白い！」という思いが強烈に伝わりました。そう話している内藤氏の生き生きとした表情がとにかく印象的でした。そして最後は三水会会長 高橋先生の挨拶により閉会となりました。

相模原キャンパスに移転して、学生の雰囲気は一気に変わりました。何がどう変わったのかは上手く表現できないですし、どちらが良いとか悪いとかそういうことでもありません。またそれは時代の流れであってキャンパスの場所関係ないのかもかもしれません。ですが、私が三陸キャンパスで過ごした頃のあの無謀さというか、行動力はあるけど…という感じや、ハチャメチャさというか、もうそれを通りこしたグチャグチャさ(笑)がとても恋しくなりました。そんな私からみると、今の学生はとにかく慎重で冷静でとても大人びて見えます。それもとても大切なことだと思います。でも、そういう学生を見ていると私はウズウズしてきてしまつて、ちょっと無茶かもしれないけど挑戦してみても良いんじゃない？やっちゃうべきなんじゃない！？と学生に日々囁いています。無茶ぶりも、日々言われ続けると無茶ぶりと感じなくなる学生の逞しさに感動します。これからも講義や研究などを通して、私の中にある三陸色を学生たちに融合させていきたいと思っています。

北里大学での45年間の思い出 水産増殖学科5期生 奥村 誠一



三水会の皆様、ご無沙汰しております。私は2022年3月をもちまして、32年

間にわたり勤めておりました北里大学海洋生命科学部を定年退職いたしました。無事定年を迎えることができましたのも、これまで私と関わりを持ってくださったすべての方々のお陰でございます。この場をお借りしてまずは御礼申し上げます。

私は本学部・研究科の卒業生です。学生時代のこと、勘定に入れますと、実に45年間本学部にお世話になったこととなります。本学部は本年度(2022年度)創立50周年を迎えましたので、その歴史の大部分を共に歩んで来たことになりました。本稿ではこの45年間の思い出話を書かせていただくと思います。

相模原キャンパスへ移転する以前の卒業生の方々であれば、ほぼ全員が三陸の素晴らしさを共感されていることと思います。1976年に水産学部に入学した私は、翌年から三陸での学生生活を送ることとなりました。東京で生まれ育った私にとっては、見るもの聞くものすべてが新鮮でした。徒歩圏内に磯があり、東京にいたころは実家から2時間程かけて三浦半島まで行き、そこで磯の生物達と戯れていた私にとっては

夢のような環境でした。授業も、好きな生物学に関わることがほとんどで、成績の良し悪しは別として楽しみながら学んでいたように記憶しています。そして何といても、三陸という特別な環境の中で培われた友情は本当に素晴らしいものでした。三陸の地で知り合い、心底信頼しあえる友が何人もできました。この歳になると、その友人達の存在が益々重要になってきまして、加齢による様々な病気、年金、社会情勢、そして思い出話などについて、グループラインでの井戸端会議に花を咲かせているところです。話を学生時代に戻しますと、学部・研究科を通じて多くの教職員の方々にお世話になりました。特に、恩師である、故藤野和男先生（本学名誉教授）、山森邦夫先生（本学名誉教授）、荒井克俊先生（北海道大学名誉教授）の三方には一生かかっても返しきれない程の御恩を賜りました。この場をお借りして御礼申し上げます。

私は本学研究科を修了後、仙台にあるアワビの養殖プラント会社に就



三陸キャンパスF-1号館の屋上から眺めた太平洋の景色を眺め、癒されたい。

職し、そこから出向していた石巻のアワビ養殖会社で働いていました。大学院ではアワビの研究をしていたわけですが、この会社に入ったことで基礎研究から離れてアワビの種苗生産・養殖の実践的な技術を学び、そしてアワビ養殖における問題点を我がごととして知ることができました。これらのことはその後の私の研究生生活にとって非常に大きなものとなりました。

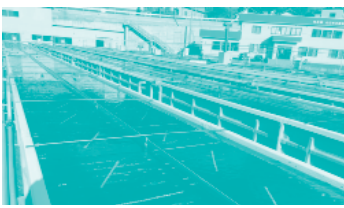
そして3年半が過ぎたころ、私は養殖会社を離れ、縁あって本学部に就職いたしました。研究者になることは小さい頃からの夢でしたので、ある意味夢が叶ったわけですが、実情は厳しく、決して順風満帆とは言えず、嘱託の助手（1年契約）としてのスタートでした。今でこそ、そのようなスタートを切り研究者としての道を歩み始めることはごく一般的ですが、当時では珍しかったのではないのでしょうか。まあ、ある意味、時代を先取りしていたのかも知れません（苦笑）。大学の教員は「論文を書いてなんぼの世界」とよく言われますが、嘱託の私にとってその言葉は死活問題でした。とにかく必死になって下手な論文を書き続けていた覚えがあります。4年ほどで嘱託を解いていただき、正式な助手として働き始めることができました。「よし、これで落ち着いて仕事ができる」ということになったわけですが、私の体内には怠け心が潜んでいたようで、今から思えば、パーマネ

ントになったとたん仕事のパースが落ちたような気がしています。研究者にとって大切なのは、自分の地位を守ったり向上させたりすることに勢力を注ぐのではなく、「こういう研究がしたいからやる、周りの人達から、こういう研究をしてほしいと期待されているから頑張る」ことが全てであることを、タイムマシーンに乗って当時の自分に言い聞かせてやりたいものです。そんな私でしたが、それでも人間は少しずつ進歩するものなのでしょう。今振り返ると、助教教授に上がる少し前くらいの時期、私のもとに大学院生が集まってくれるようになり、研究もアワビだけではなく、色々な無脊椎動物のことも対象にするようになった頃から、ようやく自分なりに研究活動が充実してきたように思います。また、講義の方も何とか自信をもって行えるようになった気がしています。少しは大学の先生らしくなってきたのでしょうか？

時代は流れ、2011年にあの忌まわしい東日本大震災が起こり、本学部は相模原キャンパスに移転しました。多くの方々のご支援・ご努力のおかげをもちまして、本学部は息を吹き

返し、三陸で培われた英知をもとに相模原の地で新たな船出をすることができました。そして早12年が経ち、現在に至っています。三陸キャンパスは大々的に整備され、三陸臨界教育研究センターとして生まれ変わりました。宿泊施設も充実しておりますので、三水会の皆さま、是非三陸へ足をお運びください。実は私、定年後大船渡へ戻ってきておりますので、三陸での楽しかった日々の思い出を肴に一杯やりましょう。ところで、大船渡へ戻ってきた、ということなのですが、「今の私は」と言いますと、三陸時代からずっと共同研究等でお世話になっているアワビ養殖の会社、元正榮 北日本水産株式会社様にコンサルタントとして雇っていただきまして仕事を始めたところです。前述しましたように、大学院を修了し、社会人として初めて勤めたのがアワビの養殖会社でしたので、定年後にまたアワビの養殖に関わる仕事ができることが嬉しくてワクワクしています。

最後になりましたが、私を慕ってくれて、そして私を支えてくれた多くの卒業生の皆様に心よりお礼を申し上げます。お陰様で本当に幸せな教師生活を送ることができました。みんなと一緒に作り上げた多くの思い出は一生忘れえないことですし、これからも私のことを支え続けてくれると思います。それではまたお会いしましょう。今回はこの辺で失礼いたします。



現在お世話になっている元正榮 北日本水産株式会社のアワビ養殖施設。

水産学部卒業後30年の集い
7・8・9・10・11期を開催して

水産学部 第九期 宮田 祐

ことの始まりは2021年12月の12FA越川成二さんからのLINEでした。

12月15日だったと記憶しておりませんが、「来年7・8・9期の合同同窓会を企画したい。ついでに来年1月15日に第1回の集まりを開催するので参加して欲しい」と依頼が来たので、コロナ禍真っ最中でしたから、あまり関わりたくない思いから「辞退したい」と伝えたのですが、結局のところ押し負けてしまいました。

「一旦引き受けたからにはさんりく魂でやり遂げるぞ」との気合いで1回目の準備委員会に参加するつもりでしたが、会合はコロナ感染の急増で延期になってしまいました。

第1回目の「卒業30年の集い」準備委員会は二カ月遅れで2022年3月13日に開催されました。白金キャンパス北里柴三郎記念館2階の北里白金サロンに3FA長谷川一敏氏、7FF藤田伸治氏、8FA内藤文隆氏、9FFの私、10FAの八井田耕



9FF宮田(右)と8FA福崎(徳受付で)さん

一氏、先の12FA越川氏6名が集まり、「コロナ禍において延期されていた『卒業30年の集い』を2022年度に開催するべく準備を開始する」との

目標に基づいた話し合いでした。

過去第1回(1・2・3期対象)、第2回(4・5・6期対象)は、それぞれ2009年と2019年に行われたのですが、その後開催されていないことから、これまでのような3期合同では間が空きすぎるので、対象の卒業期を広げることになりました。会場と集いの内容についても様々な意見が出て、瞬く間に2時間近くが経過した、それこそ充実の会合でした。次回の準備委員会には、各期有志を招くと共に協力者を募り、将来的に継続して企画を担当できる人材を確保・育成する目的も加えて、『第3回水産学部卒業後30年の集い』を実現するため、準備委員会を継続して開催することが合意されました。

第2回準備委員会は4月24日、同記念館にて開催されました。1回目の面子に7FA柳澤明美氏、8FA福崎有紀子氏、10FA中野清隆氏、11FF徳江喜一氏の4人を加えた10人での会合になりました。

第2回準備委員会で大枠がほとんど決まった感がありました。対象は7・11期、開催日は2022年11月



奥村先生講演

5日、開催場所北里大学相模原キャンパスIPE棟2階ホール、そしてプログラムは講演会と懇親会。しかし、コロナ禍に終息の兆しが認められ

ないことから、飲食をともなう懇親会は断念する方向に進みました。とにかくまずは卒業30年の集いの再開を優先し、この会を継続する機運を醸成する話し合いができた、実りあるものでした。

本番前の10月9日には第3回準備委員会が、場所を相模原キャンパスに移して開催されました。講演会会場のIPE棟を見学したのですが、想像よりも立派な会場だったことに少なからず驚きました。最終確認の打ち合わせでは、準備委員会メンバーの当日の役割分担が決まり、自分は9期の受付を担当することになりました。もちろん喜んで受けたところでもあります。タイムテーブルが提示されて「いよいよ感」が強くなってきたこの準備委員会には10月9日時点での参加申し込み状況の報告があったのですが、やはり懇親会が無いのも影響してこれまでの参加者数にはかなり及ばない状況となっております。一方では、3月の第1回準備委員会に集まった時は、本当に開催できるのか危ぶんでいたこともあり、感慨深いものがありました。参加者への記念品については複数の候補があり、まだ絞り切れていませんでしたが、その後のLINE会議で酔仙酒造『奇跡の一本松』に決まったとき

には、内心ほくそ笑み「に



千葉先生講演

やり」としてしまったことを白状いたします。

遂に当日、役目を全うするため絶対に遅刻しないようにと千葉の自宅から相模原までの移動時間を勘案して、かなり早目に出発しました。一都2県の長い道のりをなかなば恨みもしたのでありますが、もつと遠方から参加頂いている方も多いことを当日の受付で知り、ありがたい気持ちで胸が熱くなりました。

打ち合わせの積み重ねで準備は順調に進み、本番を十分余裕を持って迎えることができました。参加予定の皆さまには欠席もなく、無事会場にご案内することができました。

奥村誠一先生と千葉洋明先生にお願いした講演会は成功裏に終了いたしました。会場ではあちこちで再開を喜び、あるいは終了後に場所を移して旧交を温めたグループもあったようです。3回目の『水産学部卒業後30年の集い』が第4回目以降にも継続していくことを確信し、帰路の電車では安堵感を抱いて、この上ない至上の解放感を味わったことをご報告申し上げます。

三水会九州・沖縄地区親睦会が開催されました！

昨年11月12日、沖縄県那覇市において三水会九州・沖縄地区親睦会が開催されました。来賓に井田齊北里大学名誉教授をお迎えし、参加者39名の盛会でした。

お忙しい中、遠路ご参加くださいました皆様、そして三水会の高橋明

義会長（北里大学副学長兼海洋生命科学部教授）、越川成二副会長、長谷川一敏理事（前三水会会長・全学同窓会理事）、大坪孝志理事、北里大学同窓会事務局田村由紀子様他、沢山の方々より多大なるご指導とご支援を賜ったお陰と心より感謝致しております。

当日は沖縄県内外から、また医学部同窓会、紅緑会、理学部同窓会のOB・OGも駆けつけていただき、年代、地域、学部、学部の垣根を越え旧交を温めました。

今回は欠席を余儀なくされた方々からも、是非また開催して欲しいとの嬉しい声が多く、今後定期的に開催したいと考えているところです。

本会の源流は、4期生の古堅隆氏が長年手塩にかけて育ててくださった北里琉球会であり、今回の親睦会はそれをあげた会です。これからもこの会を継続的に開催し参りたいと思います。

幹事・平本愛明（12期）・森田和幸（13期）・眞境名（川端）芳宣（15期）

三水会 九州・沖縄地区親睦会
「ハイサイ！グスーヨーチューウガナビラ」に参加して

水産学部31期生2006年度卒業

池上 太郎

（現・琉球大学大学院医学研究科耳鼻咽喉・頭頸部外科学講座 助教）

2022年11月12日に沖縄県那覇市において九州・沖縄地区の同窓会が開催されました。会場に着いて、

まずびつくりしたのが、主催してくださった12期の平本愛明さん、13期の森田和幸さん、15期の眞境名（川端）芳宣さんが中心となって、とてもアットホームな雰囲気を作ってお出迎えてくれたことです。私はほとんど初めてお会いする先輩方ばかりでしたが皆さんとても優しくお声掛けいただいたおかげで、すぐに溶け込むことができました。参加者は、全国から来られており、また医学部、獣医学部、理学部の同窓生も参加されていました。

さらに井田齊名教授もゲストとして来られており、スライドで三陸の昔の懐かしい写真や現在の状況をお話くださいました。井田先生は昔と全く変わらず、背筋がピンとしており、現在もフィールド調査研究を現役で続けられているというお話で、私も同じ研究者として刺激をもらいました。さらに3期の全学同窓会理事の長谷川一敏さんが三陸の美酒、酔仙を皆さんに振る舞ってくださいました。参加者は世代がバラバラで同じときに三陸キャンパスにいたわけではありませんが、三陸の共通点でみんな一瞬で学生時代にタイムスリップし心が一つなる不思議な体験をしました。



井田先生講演

また森田さんのはからいでプロの歌手の前田秀幸さんの歌と三線の演奏も行われ、より一層盛りあがりしました。そして、三水

会より巾着袋を参加者全員にプレゼントしてくれました。大切に使用させていただきたいと思えます！今回は楽しい同窓会を開催してくださり、本当にありがとうございます。今後も皆様と交流できることを楽しみにしております。

三水会 九州・沖縄地区親睦会
に参加して

藤原 玲子

水産学部31期生の藤原玲子（旧姓・角南）と申します。

私は2010年から沖縄で暮らし、古堅先輩主催の三水会の集まりに数回参加していました。が、心身を壊してからは参加が叶わないまま、コロナ禍へ…。ちょうど昨年より在宅での仕事を始め、ようやく大人数の中でも過ごせるほど回復した



参加者集合写真

タイミングで届いた開催通知に、すぐ参加を決めました。その日は朝から残念な空模様。少し肌寒い日でしたが、会場は昭和歌謡が流れ、先輩方が談笑する、とても暖かな雰囲気になっておりました。

懐かしき【酔仙】の酒に舌鼓をうち、先輩方や同期の池上太郎君との再会、海洋生命科学部4期生の有馬史織さんとの出会い等、とても楽しい時間でした。中でも、井田齊先生とお話しできた際には、嬉しさで随分と興奮してしまいました。

岩手県出身でありながら、震災後の三陸町を私は未だ訪ねていません（姉がいる大槌には何度か行ったのですが）。井田先生が見せてくださった、震災による三陸の変遷を記録した写真の数々。その1枚1枚に懐かしさと寂しさを感じました。

終わる頃には、私はすっかり声が枯れへろへろに。一方の井田先生は「明日の昼前に那覇を発って深夜には三陸に到着予定」と。若々しさと活力は健在のご様子で、まるで時が止まっているかのようでした。

最後になりましたが、この素敵な会を主催してくださった幹事の皆様から感謝申し上げます。次回の開催が早くも待ち遠しいです。



参加者聴講

着任のご挨拶

環境生物学講座

水圏植物学研究室 講師

羽生田 岳昭



初めまして。

2022年4月1日付けで水圏植物学研究室に着任いたしました羽生田岳昭と申します。

よろしくお願いいたします。

「水圏植物学研究室」という研究室名に馴染みが無い方も多いかと思われます。2022年4月に環境生物学講座の研究室が3研究室から4研究室となり、「沿岸生物学研究室」に所属されていた難波先生とともに「水圏植物学研究室」を運営していくことになりました。水圏植物の中でも海藻類をはじめとした大型藻類の研究を主とした研究室になります。今回はこの場をお借りしまして、私の経歴や研究内容について紹介させていただきます。

私は長野県の出身であり、大学時代も山岳部に所属するなど、20代の初めまでは海にはあまり縁がない生活を送っていました。卒業研究を選ぶ際にも、講義で研究内容を聞き興味があった高山植物の分子系統地理学をやりたいと考えて研究室を選択しました。しかしながら、いざ研究

室に入ってみると高山植物関係の研究プロジェクトはあらかた終了してしまっており、新たな研究テーマは無いような状況でした。そんな時、降って沸いたように現れたのが「マリモ」でした。特別天然記念物として有名なマリモは高山植物と同じように隔離分布していることから、系統地理学の研究材料として適しているかもしれない、との話を聞かされ、研究材料にはそれほど思い入れがなかった私は藻類を研究材料とすることにしました。思いがけず藻類の研究をすることになったわけですが、これが今日に至るまで藻類を研究するきっかけとなりました。

その後マリモに関しては博士後期課程まで研究を続けました。マリモが属するシオグサ（塩草）目は、名前から想起されるようにその多くが海産種であり、マリモの近縁種探索をする中で自然と海藻にも触れ合う機会が増え、それに伴い研究対象が海藻類や淡水紅藻類などにも広がっていききました。

学位取得後しばらく筑波大学で勤務した後、神戸大学内海域環境教育研究センターに着任しました。「内海域」の名前の通り所属していたセンターは海を対象とした研究を主目的としており、そこからは主に海藻類を対象とした研究を続けてきました。近年淡水藻類の研究を再開する

ことになり、現在は主に以下のような研究を行なっています。

大型藻類の系統分類学的研究・海藻類は沿岸の生態系を構成する最も重要な要素の一つですが、その多様性や進化には未知の部分が多くあります。日本周辺の沿岸は世界で最も海藻類の種多様性が高い地域ですが、未だに毎年複数の新種が報告されています。現在、大船渡市の舟作海岸において未記載種と考えられる褐藻類の存在を確認しており、来年から本格的に研究を始めたいと考えています。

大型藻類の保全に関する研究・陸上の植物に限らず水圏の植物においても、人間活動や環境変動等により絶滅の危機に瀕している種は少なくありません。海藻類で唯一国の天然記念物に指定されているクロキツタ、北里柴三郎博士の故郷小国町に隣接する南小国町に生育するオキチモズクをはじめとした淡水紅藻類、前述のマリモなどについて、遺伝的な側面からその個体群維持の仕組みを探り、保全に役立てようとしています。

来年度からは学生達と一緒に本格的に研究を進めていくことになり、数年後にまた研究成果を皆様にお伝えできるよう励んでいきたいと思えます。また、相模原にお立ち寄りの際には是非研究室にお立ち寄りください（特別天然記念物に触れて

いただくことが可能です）。

最後になりますが、本稿執筆の機会を与えていただきました三水会高橋会長、長谷川理事、並びに会報担当内藤様に感謝いたします。

新任のご挨拶

増殖生物学講座 水族増殖学研究室

福田 和也



はじめまして。

2022年度4月1日付で増殖生物学講座、水族増殖学研究室に助教として着任させていただきました。福田和也と申します。若輩者ですが、歴史ある北里大学海洋生命科学部にて教育・研究の場を頂けましたことを大変光栄に感じております。この場をお借りしまして、三水会の皆様にご挨拶を申し上げます。

私の故郷は海に面していない埼玉県にあります。幼少の頃から魚や昆虫が好きだったので、その中でも海洋生物には特別大きな興味がありました。今思えば、海の無い地域で育った私にとって、それらはまさに未確認生物のような神秘的存在だったのだと感じます。そして、

「海」「魚」というキーワードを頼りに東京海洋大学へ進学しました。私は野生の魚たちの世界に興味があったため、SCUBA潜水によって魚の行動を観察し、適応的意義の考察・実験的検証から行動形質の進化的背景を解明する研究（行動生態学）を行っていた研究室へ入れて頂きました。特に魚同士が秩序立った個体関係を作り出す現象（社会行動）には大きな衝撃を受け、学生時代はそのような魚の社会行動を研究しました。古典的な動物行動学分野では、ある刺激に対する魚の応答法則を見出すことが一つの大きな目的です。しかし、研究を続けるうちに、私には魚がある刺激に対して定性的な応答をするという単純なアルゴリズムで動くとは思えなくなりました。もっと柔軟で、自分を取り巻く社会状況を鑑みた意思決定を行い、「うまく」局面を切り抜けながら他個体と共存している：そんなヒトの精神活動のような背景が浮かんで仕方なかったのです。しかし、行動観察のみから動物の心情（いわゆる内語）を主張するのは、動物行動学における一種のタブーと言われるほどに曖昧な見解です。そこで、現在私は行動制御に最も近位な生体器官である脳をもう一つのフィールドにしています。様々な社会状況において適切な意思決定を可能にする脳の機

能・構造を幅広い分類群で比較することで、精神活動や心という無形の存在を、自然選択を受けて変遷した物質的実体として捉えることができると考えるからです。現在はこのアイデアをより多角的に検討するため、インターフェースとなる分子生物学や生理学、神経解剖学などを駆使し、魚に見られる社会行動の適応進化を比較神経科学的側面から解明しようと日々精進しております。そこには、我々が持つココロの原型があるはずです。

私が着任させて頂いた水族増殖学研究室は、千葉洋明准教授を筆頭とする研究室であり、「生態・生理・内分泌から魚類の繁殖について研究し、水産資源の増殖と持続的利用を目指していく」ことをスローガンとしています。こちらの研究室で、私は元々の興味の果てであるココロの進化を追求することに加え、これらの手技・知見を社会に役立てる方向へ出力していこうと考えています。例えば、養殖現場で同種他個体が顔を合わせると、血気盛んな魚種ではすぐに喧嘩を始めてしまいます。別の種では、社会順位に従って雌から雄に性転換を行う集団構造を持つため、養殖現場で雄が少なくなってしまう状況などがあります。これらの問題も、元を辿れば魚たちが他者を認知し、その中で上手く適応しよう

とする生得的に備わっている社会的能力が根底にあります。したがって、魚の社会行動を司る脳機能を理解することは、水産資源の増殖と持続的利用を目指す問題解決に役立てることができると考えています。

以上、拙文となり恐縮ですが、自己紹介にお付き合い頂きましてありがとうございます。まだまだ半人前の私ですが、本学部教員の名に恥じない活動を目指す所存です。皆様どうぞ宜しくお願い申し上げます。

就職ガイダンスに参加して
23FA 北吉 直子

我が母校の学生も、世間のご多分に漏れず「今どきの若者」になっているのかなあ、と思っていたが、そんな事もなく、まじめで素直な学生達が多くて安心した。

最近の若者達は、たくさんの不安に囲まれ、自身も不安でしかたがないのだろう。その反動なのか、「適当でいい」「嫌ならやらない」という人が増えてきたと言われている。仕事に対しては「家でしたい」「上司や同僚とコミュニケーションをとるのが面倒」といった話をよく聞くようになった。我が母校の後輩達は、就職活動や社会人になることへの不安は大きかったようだが、まじ

めに就職活動に向き合い、社会人として仕事をする未来を考えているようで、前向きであった。個別に質問してきた学生が多く、そのなかの1人の学生が「転職の話が聞けてよかったです」と告げ、満面の笑みを浮かべて帰っていったのが印象的だった。就職する前から転職の話しなんて、と思っていたが、説明して良かったようだ。

学生達は、就職活動に成功して幸せそうな人たちのインタビュー記事を読むたびに、また就職情報サイトの煽り文句に、恐怖をすり込まれていくようだ。学生の一人が「ネットの就職活動の記事をもう見たくない」とぼやいていた。私が就職活動をした時代は、情報を集める手段が少なくて困ったものだが、「便利になったから良い」というわけでもなかったのだなと気づかされた。

今回は、就職活動のノウハウだけでは学生達の不安を解消しきれないと考え、近い年齢の人に話しをしてみよう事を思いついた。学生自身が、転職で苦労をした経験を持つ人の話しを聞き、質問をするのである。後輩に適任者がいたので、学生達に苦労話をしてほしいとお願いしたところ、快く引き受けてくれ、学生達の質問に丁寧に答えてくれた。あげくに、ガイダンスで話をした感想を嬉しいすると、とてもまじめ的確

なコメントをくれた。以下、ガイダンスで経験談を話してくれた遠山早紀さんのコメント「就職ガイダンスでお話しさせていただくにあたり、自身の大学卒業から現在までを振り返りました。私は就職活動や転職活動中の『先が見えない』ということがとても大きな不安だと感じていました。今回のガイダンスを通して、就職活動中に進路が決まらず不安な時や、転職活動で迷った時に、あんな話しをしていた人もいたなと思出し、何かを切り開くキッカケになれたらと思つて話をしました。学生の反応が、自身が学生だった頃と比べて素直で、しつかりしていても頼もしく、将来への可能性もこれからもっと広がっていくように感じられました。」

いつの時代も就職活動は不安だと思ふが、その時の世間の反応や、隣に誰がいてくれるかで状況は大きく変わると思われる。せめて我が母校の学生には、少しでも気持ちを楽に就職活動して欲しいと思ふ。寄る添える大人の一人になりたいと強く感じるガイダンスとなった。



就職ガイダンス受講の学生

“ 掲 示 板 ”

■ 2023年度三水会定期総会のご案内

下記により2023年度三水会定期総会を開催します。

代議員はもとより一般会員も傍聴できますのでご参加ください。

開催日時：2023年5月20日（土）午後3時～（受付：2時30分～）

開催場所：北里大学白金キャンパス プラチナタワー12階3125会議室

（注）感染症等の影響により定期総会は中止になる可能性があります。

詳細につきましては三水会ホームページを、ご覧ください。

また、開催場所は大学の都合により変更される場合がありますので、ご参加の方は下記の三水会事務局までご確認ください。

TEL：0120-873-135 <http://kitasato-sansuikai.jp/>

- 議 事
- 1 2022年度事業報告及び収支決算報告
 - 2 2022年度監査報告
 - 3 2023年度事業計画及び収支予算
 - 4 その他

*総会終了後、講演会を予定しています。

■ 一児玉正昭先生追悼集—正昭その愛

令和2年8月30日にご逝去された児玉正昭先生の追悼集ができあがりました。

卒業生の追悼文は三水会ホームページをご覧ください。



編集後記

2022年度はいまだに続くコロナとウクライナ戦争で始まり、どちらも終息が見えないまま不安定な社会情勢が続いています。そのような不安要素をかかえながらも三水会では「卒後30年の集い」を3年ぶりに再開し、講演会という形でコロナへの対応を取りながら6期生から11期生までの多くの会員の方々が一同に集うことができました。今後も学生時代に培った科学と逆境への対応力をフルに活用してリスクを押さえながら最大限に会員同士の親睦の輪を広げていきたいと思ひます。学部も50周年をむかえました。相模原に移って12年が経とうとしています。会員の皆様のご理解とご協力をいただきながら三水会も新たな時代に向けて徐々に活動を始めていきたいと思ひます。